

sapporo education and culture hall news
Raku



地域とともに歩み続ける教文

「使いやすい」を支える取り組み

札幌市教育文化会館は今年45周年を迎えます。市内に文化施設がほとんどなかった時代に、札幌市視聴覚センター（※1）を管轄施設として有する教育施設として、また芸術文化の中核施設として、市民の皆様から高い期待を寄せられて誕生した公立施設でした。開館以来一貫して引き継がれているのが、「市民に利用されてこそ教文」という思いです。1982年の情報誌（※2）には「舞台技術相談」というお知らせが掲載されており、そこには「公演に向けての準備、進行等の相談を一カ月前より行い、初めて使用される方を対象に舞台の特色を生かした専門的な知識や技術をわかりやすく説明し、手作りの舞台を成功させるために相談を受けます」とあります。この頃から当館の利用率は舞台芸術発表、研修・学習、音楽、舞踊の練習の場として年間約80%前後と高かったことが特徴で、市民にとって「借りやすい、使いやすい」教文であるために専門スタッフが親身にサポートする体制は今も変わりません。利用者さんと事前に何度も打ち合わせを重ね、一緒に良いステージをつくりあげていくことを心がけています。また、新型コロナウイルス感染症の流行が終息したとは言えない状況が続く中、ホールを借りることに対する心理的・予算的な負担を少しでも軽減できるよう、

ホールを利用される方に補助金の紹介と申し込み手続きのサポートなども行なっています。ホールの舞台機構や楽屋を公開するバックステージツアーなども含め、これからも市民にとって開かれた施設であるとともに、「やってみたい」という気持ちを後押ししていただける存在でありたいと考えています。

札幌市「教育」文化会館であること

札幌市の学校教育並びに芸術文化活動の中核的拠点として開館した当館の歴史を今も色濃く感じられるのが、初年度から毎年小ホールで共催している高校文化連盟（以下、高文連）石狩支部の演劇発表大会です。特に教文のオープン当初においては、教育事業として高文連と共催で発表大会の半月前に舞台技術者講習会を開き、照明や音響、舞台装置の基本的な使い方を学んでもらったり、主催事業として高文連石狩支部の合同公演を行ったりするなど、力を入れていたことが伺えます。さらに、中学生のための校内放送技術講習会や、その成果としての校内放送コンテスト、中学文化連盟（以下、中文連）の音楽発表会、小学校器楽アンサンブルコンクールなど、学校の文化活動と密接に関わりながら普及の一端を担いました。高文連演劇部との取り組みはやがて中文連演劇部にも波及し、1985年からは中文連演劇発表大会もスタート。1997

年には札幌で初の試みとして、札幌市内の中学校と石狩地区の高等学校の代表校が一同に発表しあう「中文連・高文連演劇フェスティバル」が開催されました。現在も、高校・中学の演劇部員にとって、教文の小ホールは年に一度の発表大会を行う大事な場所であり続けています。普段の業務の中でも、中学生や高校生のときに文化系の部活に所属されていたお客様から「教文にはよく発表会に来ていました」と言われることが多く、施設名に「教育」という言葉を入れた当時の人たちの願いが、45年の歩みを通して豊かに育っていることを感じます。

市民の芸術文化活動を応援する

中文連・高文連の演劇発表大会の他に、北海道唯一、人形浄瑠璃を行う一座として1995年から活動する「さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座」の定期公演や、能楽の普及を目指して1959年に創設された札幌能楽会の公演「能楽鑑賞のひととき」も長く共催をしています。当館は伝統芸能を事業の柱の一つにしていることもあり、札幌で触れる機会の少ない能楽や人形浄瑠璃を「この地に根付かせたい」と活動する両団体を、「共催」という形で少しでも応援できればと考えています。また市民の芸術文化活動をサポートする上で、もう一つ当館の大切な役割として挙げられるのが「札幌市民芸術祭」における事務局業務です。100人を超える市内

の芸術文化関係者が委員を務める札幌市民芸術祭実行委員会、札幌市、当財団が共催する芸術祭で、事務局が当館内に設置されています。札幌市民芸術祭は1947年開催の「市民美術展」がその始まりで、音楽、演劇、舞踊、文芸と分野を拡げながら1973年には「札幌市民芸術祭実行委員会」が発足し、現在に至ります。長い歴史を持つ市民による市民のための開かれた芸術祭であるだけに、新型コロナウイルス感染症の流行下であっても困難を乗り越えて開催することの意義を感じています。市民の方々が発表の場を求めていること、芸術祭への参加が生きがいとなっていることを改めて強く実感するとともに、事務局としてその思いにきちんと応えていかなければならないと考えています。

※1:1999年に運営管理を(財)札幌市生涯学習振興財団に移管。
 ※2:開館当時、札幌市視聴覚センターが独自に発行していた情報誌「AVC情報」は、当館が発行する「会館だより」と合わせて、開館当時を知る貴重な資料です。1978年には両誌が統合し、「教育文化会館ニュース」となりました。その後、2007年から現在の「楽」となり、2010年からは「act」も発行しています。

【特集】

地域とともに 歩み続ける教文

2022年に開館45周年を迎える教文。
市民の皆様を支えられながら成長してきた教文の「地域密着型公立文化施設」としての歩みをご紹介します。



地域に根ざす教文の特徴①

「使いやすい」と支持されるサポート体制

当館の舞台を熟知した舞台係が窓口となり、タイムスケジュールの組み方から安全管理の条件を満たす演出方法まで、さまざまな相談に乗っています。主催者と舞台技術者の間に立ち、限られた予算の中でも「良いステージにしたい」というお客様の願いにできるだけ近づけるような提案を心がけています。



地域に根ざす教文の特徴②

「一年間の成果はここで見せる」。文化部活動の発表の場

中学校や高校の演劇部、吹奏楽部、合唱部…などさまざまな文化部活動の発表の場として使われている教文小ホール。高文連の演劇発表大会では当館から毎年優れた舞台技術に対して、舞台技術賞（理事長賞）と、優れた脚本を書いた生徒に創作脚本奨励賞（館長賞）を贈呈しています。

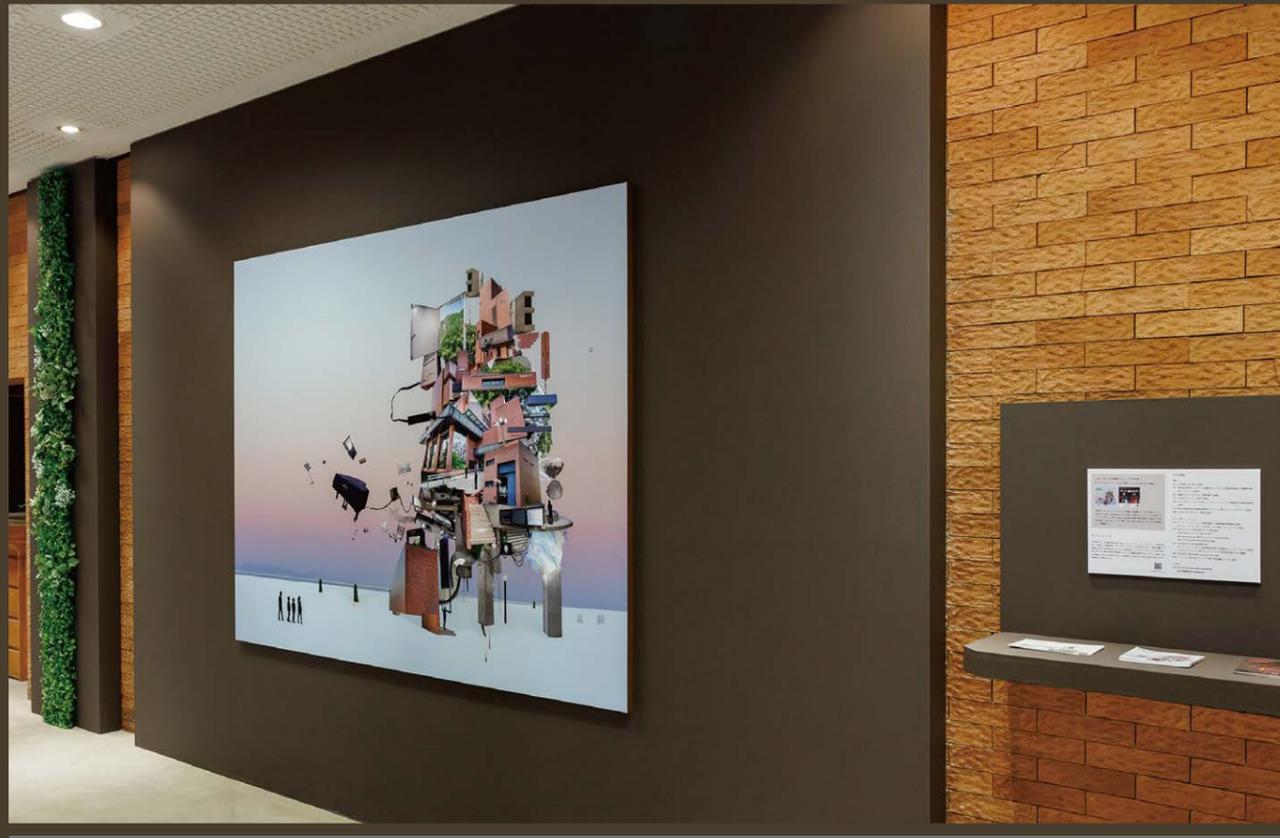


地域に根ざす教文の特徴③

活動団体との長く続くお付き合いは貴重な財産

例えば、定期公演を長く共催している札幌能楽会の方々には、小・中学生を対象とした能楽WSのほか、2018年や2019年の能楽公演における関連イベントで能面に関してご協力いただくなど、信頼関係があるからこそその取り組みに発展することも。さまざまな活動団体との長く続くご縁は、当館の財産です。





デジタルコラージュ作品が追加!

「地元作家×教文」のオリジナル作品

地元作家とのコラボレーションで制作された作品はオープンスペースで公開中。4月に追加された作品を中心に取り組みをご紹介します。



この作品は教文情報誌「act」36号の表紙に使われており、クスマさんのインタビューも掲載されています。右記より御覧ください。



[アーティストプロフィール]

PROFILE

クスマエリカ
Erika Kusumi
フォトグラファー、ウェブデザイナー
美術作家

1982年生まれ。北海道札幌市出身・在住。自身が体験した“現実”を記録し、時間も空間も異なる写真を幾層にも重ね合わせ、デジタル処理を施した「デジタルコラージュ」作品を制作。写真以外の素材は一切使用せず、全て自身で撮影した写真のみを用いている。誰もが目にすることが可能な現実の風景を再構成することで、非現実な世界でありながらも、現実・日常の延長線上、あるいは平行線上に存在する世界であることを表現する。

当館2階の休憩スペース(旧レストランススペース)に、写真家/美術作家のクスマエリカさんによるデジタルコラージュ作品を展示しました。この作品は情報誌「act 36号」のために制作していただいたオリジナル作品で、当館で撮影した素材とクスマさんがこれまで撮りためた素材をコラージュしたものです。この号ではXR技術(※1)を用いたシナテムやアプリケーションの開発をしているシベリア興業(現・株)きたまいかさんとコラボレーションし、本作のAR(※2)バージョンも楽しめるようになっていきます。また同スペースからも眺められる1階ロビーに掲出した能面とフラワールームのコラボレーションによる巨大ビジュアルは、「act 32・33合併号」のために能面作家の外沢照章さんとフラワールームアーティストYANASEさんに制作していただいた作品です。その横には、切り

絵作家の最上怜香さんと書家の若山象風さんによる教文和文化プロジェクトのロゴマークも並びます。当館はこれまで、地元の実演家と密接に関わりながら舞台芸術分野の事業を行ってきた歴史があります。近年ではそうしたネットワークが分野を超えて広がり、さまざまなアーティストやクリエイターとのつながりから新しいプロジェクトを展開しており、「act」での取り組みはその一例です。ここでも自主事業と同様、企画段階からアーティストと対話を重ね、強度のあるオリジナル作品を制作していただいています。そうして生まれた作品をより多くの人の目に触れる空間に掲出することで、アーティストと市民との出会いを少しでも広げることができればと考えています。今後地元アーティストやクリエイターと協働しながら、新しい付加価値を創出できるような取り組みを実施していきたいと考えています。

※1：現実世界と仮想世界を融合することで現実にはないものを知覚できる技術の総称で、VR(仮想現実)、AR(拡張現実)などがある。
※2：AR(拡張現実)は、スマートフォン等を通じて、仮想のデータや画像を現実世界に重ね合わせて体験できる技術。

地域に根ざす教文の特徴④

当館の成り立ちとも共鳴する「札幌市民芸術祭」

誰もが気軽に参加できる芸術祭として市民主導で始まった市民芸術祭。音楽、演劇、舞踊、美術、文芸など幅広い分野にわたって市民の芸術文化活動を応援し、札幌市の芸術文化を振興するため、10事業を実施しています。市民合唱祭や邦楽演奏会など複数の事業が当館のホールで開催されています。



地域に根ざす教文の特徴⑤

地元のアーティストやクリエイターとの協働

長年培ってきた地元の実演家とのネットワークを活かし、WSなどさまざまな事業で協働。事業設計段階からコミュニケーションを重ねるなど、密な関わり方が特徴です。近年は和 cultura プロジェクトなどのように、舞台芸術にとどまらない幅広い分野のアーティストやクリエイターとの協働も増えています。



過去の情報誌に目を通すと、市民の皆様への支えのもと、さまざまな文化芸術活動団体や各施設・機関の仲介的役割を当館が担い、個々の点としての活動をつないで面としての広がりを持った創造的活動へと発展させるような自主事業のあり方について模索していることが伺えます。当時の舞踊、演劇、伝統芸能、音楽、映画、学習型事業という幅広い分野における事業の蓄積と、さまざまなネットワークによって新たな展開を生み出そうとする意思を連綿と引き継ぎながら、自主事業のあり方は近年、焦点を絞って深く追求する設計へと移行してきました。例えば、アメリカのコミュニティダンス・カンパニーの公演をきっかけに、地元の公演参加

メンバーからの継続を求める強い希望によって生まれたコミュニティダンス事業(2009〜2018年度実施)は、「コミュニティダンス」というそれまで札幌になかった文化を市民とともに手探りで成長させていく取り組みとなりました(※3)。また、開館当初から行っている「ワークショップ(WS)」を通して作品をつくり発表公演を行う事業は、近年では「子どものためのオペレッタWS事業(2004〜2015年度実施)」を経て現在は「子ども演劇WS(2016年度〜)」として継続。1985年に初開催された教文演劇フェスティバルは、主要企画へと成長した教文短編演劇祭も含めて常にアップデートを試みながら継続しています。地元の実演家と協力しながら事業を共につくりあげていく体制も、開館以来変わらない当館の特徴です。近年はさらに和 cultura プロジェクトとしてホワイエ(ロビー)や札幌文

※3:教文コミュニティダンス事業の10年の歩みを振り返る冊子「ダンスアーカイブ」をホームページで公開しています。ぜひご覧ください。

化芸術交流センターでの能楽展示など、地元のアーティストやクリエイターと協働することで創造的な事業へと発展したのもあります。当館は2023年1月から大規模改修工事に入るため長期休館となりますが、これからも地域に根ざした公立施設としての強みを生かしながら、新しい付加価値を入れた事業設計を目指していきたいと考えています。





Japan Culture Tour

和文文化巡り

第11回 | マリヤ手芸店

伝統芸能とともに日本の文化の魅力を気軽に体感してもらう「和文文化プロジェクト」。連載11回目は、マリヤ手芸店をご紹介します。



マリヤ手芸店

札幌市中央区北一条西3丁目3番地
時計台前仲通

tel.011-221-3307

営業時間 / 10:00~18:00
定休日 / 水曜

<http://www.mariya3.com>

手作りの楽しさを伝える、 地域に根ざした手芸店

マリヤ手芸店は織り、染色、刺繍をはじめとするさまざまな手工芸の材料と関連書籍を取り揃える専門店。市内唯一の日本人形コーナーには、材料に加えて人形や羽子板が展示。約800種類が揃う金襴、友禅、縮緬などの人形用布地は目に美しく、和小物作りに挑戦したくなるはず。ここでしか手に入らない本を目当てに道外からお客さんが訪れる書籍コーナーには、司書資格を持つスタッフが選書した「アイデアが湧きつっかけになるような」手仕事やデザインに関する書籍や洋書がズラリ。日本の伝統文化に関する書籍も充実しており、日本髪の歴史や着物の文様を解説する本など、手に取りたくなる本が並びます。店舗上階では「ヨーロッパの伝統刺繍」、「加賀ゆびぬきと手まり」、「金継ぎ」などの教室も展開。ギャラリも備えており、さまざまな手工芸の展覧会が開催されています。1926年の創業以来、「暮らしに夢をもる趣味の創作を広げる」という願いを込めて、初心者からプロフェッショナルまで幅広い作り手を応援してきたマリヤ手芸店。幼稚園や高齢者施設から手芸に関する相談が寄せられることもあり、地域に根ざした手芸店として手作りの楽しさを伝え続けています。ぜひ足を運んでみてください。

SAPPORO ENGEKI no WA

前田 透さんから指名

【プロフィール】

磯貝 圭子

Keiko Isogai

新ひだか町三石出身。AGSスタヂオを経て、札幌座の前身TPS発足時から所属俳優として活動。舞台以外に映画・CM出演、ナレーションや司会、歌の仕事も。講師として小・中・高・専門学校等で演劇ワークショップも行っている。猫とBTSをこよなく愛する50代。



演劇

のわ

札幌座

磯貝 圭子

【次回公演情報】

札幌コンサートホール開館25周年

Kitaraのバースディ

2022年7月2日(土)

札幌コンサートホール Kitara 大ホール

第2部/シェイクスピア『夏の夜の夢』に語り手として出演

決まった台詞を再現しながら
「今初めてここでその出来事に出会う」。

札幌座所属俳優として、劇団公演のほか映画やCM等への出演、講師としても活躍する磯貝圭子さん。演劇のスリリングな側面や演技について語っていただきました。

— 数多い出演作の中で、特に大切な作品を選ぶとしたら何ですか？

芝居の基本や大事なことを学んだ『冬のバイエル』です。国内外で何度も再演し、30代前半から約10年に渡って演じ続けたことが財産になっています。また『西線11条のアリア』を震災直後に再演したときのこと印象に残っています。死者の話なのですが、お客さんが食い入るように見ているのが伝わってきて、いつもと全然違う客席の雰囲気、社会と演劇が繋がっていることを強く感じました。

— 4月に上演された納谷真大さんと二人芝居も面白かったです。

普段は稽古で、ある程度目指す方向性を確認してから舞台に立つのだけど、あの二人芝居は初日を迎えるまでどんな流れになるのか全然読めなくてとにかく飛び出して最初の台詞から始めれば、どこかには行き着くだろうというハラハラしながら相手を集中し、一歩踏み外せば相手共々真つ逆さまという綱渡りをする勇気と、「でも演劇ってそういうものだったよね」という気づきがあった。この歳でそれを経験できたのは貴重なことでした。

— スリリングな側面があるのですね。

決まった台詞を言う再現性を必要とされながら、慣れた瞬間に面白くない芝居になってしまうので、台詞を再現しながら「今初めてここでその出来事に出会う」ということをしなないといけません。昔は「初めて出会ったように見える演技」をしていて、演出家から「舞台にいてくれ」と何度も言われました。「この人にこう言われたら、球をこう投げ返す」と予定している人が舞台にいてはダメで、「舞台にいて」ためには「本当に初めてのことだと思えばいいんだ」と10年経って気づきました。

— 以前「自分の方法論を持つこと」にも言及されていました。稽古時に「ここに立つとこんな関係性に見えるんだな」など自分以外の役者の立ち振る舞いを観察し考えることで自分なりの方法論が蓄積されました。稽古や本番で仮説と実験と検証を繰り返して、考え続けることが大切です。

— 演技に対する原動力の根底にあるものは何ですか？

人間について考えることが好きなんです。俳優は自分とは異なる思想や生活実感を持つ役柄について考え続けて演じることで、人間のさまざまな有り様を知ることができ、これからは年齢を重ねた役が増えていくので、その役柄が抱える長い人生をきちんと演じ、演出家からの深い求めにも対応できる俳優になりたいです。